

小学校社会科における地域素材の教材化について

—行田足袋と地域学習—

田 村 均 埼玉大学教育学部社会講座

キーワード：地域教材、地域学習、他地域との結び付き、文化財、行田足袋

1. はじめに

2015年(平成27)3月、埼玉県の行田市郷土博物館に収蔵されている足袋に関する資料群4,971点が国登録有形民俗文化財「行田の足袋製造用具及び製品」に登録された。ミシン、裁断機、足袋金型、金型型紙、仕上げ道具などの各種の足袋製造用具にくわえ、足袋製品、同部品のコハゼ(甲馳)、カラー印刷物の足袋商標がその対象となった⁽¹⁾。

大正期に全国一の足袋産地に成長した行田市は、昭和10年代初頭に全国足袋生産の約8割を占めた。そして第2次世界大戦後においても、足袋需要が衰える昭和40年代まで全国有数の足袋生産地であり続けた。関連資料群の文化財登録は、足袋産業とともに歩んだ行田市の歴史的遺産をあらためて「発掘」し、日本の地方都市(地場産業都市)の近未来を展望する好材料の一つとなるものと思われる。とともに、行田足袋の来歴を振り返り、資料群の学校教育への効果的な活用が望まれよう。

本稿は、足袋関連資料群の国登録有形民俗文化財への登録を重要な節目とみなし、小学校社会科中学年の地域学習における町の歴史とモノ資料(文化財)の融合的把握をめざすための地域素材として行田足袋に注目し、その教材化の視点を提示する。

まずは子どもたちが、自分たちにとって身近なものではない足袋に対する再評価が古くから残る建造物に目を向け町の再生をめざす取り組みの中から生まれていることを知り、身近な地域の特色や町/市の歴史を見直す人びとの思いを理解する。そして、地域素材としての足袋を現代から過去に遡及させることで他地域との多様な結び付きに気づき、現代と過去をつなげる共時的な視点を獲得することによって、その一員として地域社会への愛着がもてるようになる学習を構想してみたい。

2. 町の中へ—昔から柄足袋や色足袋はあったのか?—

(1) いまの町の中へ

近年、行田足袋について、その市民的関心を高めて“まちづくり”(地方都市の活性化策)に活かそうとする取り組みが民間団体により試みられてきた。2000年(平成12)に行田商工会議所が実施した中心市街地活性化事業(「民学官パートナーシップまちづくり支援事業」)をきっかけに、市内に多数存在していた足袋蔵(足袋製品保管のための土蔵)に注目した市民有志が足袋蔵の借り上げと修理を行田市の支援・協力を得て実現した。使われなくなった足袋蔵の保存と活用を試みようとする市民的協働である。このうごきは、2005年(平成17)に結成されたNPO法人「ぎょ

うだ足袋蔵ネットワーク」の活動にひきつがれ、「足袋の町・行田」の再発見と魅力を発信するものとなり、内外の関心を高めるものとなった⁽²⁾。

なかでも特筆したいのが、足袋蔵ネットワークが行田市教育委員会との共催によって実施した、市内の足袋蔵を徒歩で巡回するプロジェクトである。「足袋をはいて足袋蔵を旅しよう」というキャッチフレーズを打ち出したこの企画は、足袋をはかなくなった私たち現代人が日常性のなかで足袋を体感し、行田足袋の来歴と遺産に想いを馳せるユニークな試みとなった。和装をはじめ思い思いの服装の市民が足袋をはいて町を散策する。町の魅力が足袋によって再発見され、足袋の魅力が町によって再認識されたといつてよいだろう。

現在、数少なくなった足袋メーカーが現代風の柄足袋を生産しはじめ、そのカラフルな足袋を洋装の一部としても多様な人々が受け入れはじめている。近年、色彩豊かで斬新なデザインの柄足袋は、町を愉しむ大人が歴史的建造物群の保全・活用された街区を散策するときの新ファッションとしてだけでなく、行田市内の幼稚園では幼児の身体的成長を育むための教育的な新衣料としてもとりいれられている。町の再生をめぐる観点のみならず、教育（身体論）においても足袋の魅力が再評価する新たなうごきが生じているといえよう。

(2) むかしの町の中へ

とはいえ、あらかじめ指摘しておく、今回の文化財登録の対象となった足袋製品は白および紺足袋であり、柄足袋や色足袋はふくまれてはいない。その理由は、行田市内で白・紺以外の、かつて生産されていた色物足袋がいまだ発見されていないからである。足袋を地域学習のための地域素材として位置づけるには、白・紺足袋よりも近年ふたたび生産されはじめた柄物ないし色物の足袋のほうが好ましいだろう。小学校中学年の児童にとって、鮮やかな色彩や模様が施された足袋のほうが感覚的にフィットし、より強い興味・関心をもちやすいと思われるからである。身近な地域である行田市の歴史＝「今と昔」を往来的に学ぶ子どもたちの興味・関心をひきだすには、旧来的な白・紺足袋よりも、子どもたちの色彩感覚にフィットしやすい、現代に復活したカラフルな柄足袋や色足袋のほうが好適となろう。

『福助足袋の六十年』によると、大正中期になるとそれまで紺と白だった足袋に紫、海老茶、藤紫、納戸、オリーブなどの単色無地の色物が加わり、全国的に流行したという⁽³⁾。けれども、行田市内でも戦前期に生産されていたかもしれない柄足袋や色足袋の現物資料は、今のところ一つも見つからない。したがって、近年におけるカラフルな柄足袋の出現は、歴史的建造物に着目するまちづくり活動の高揚のなかで一部の愛好者による新しい足袋の受容とあいまった足袋メーカーの現代的で当世風の創作品ではないかとの疑念を筆者は抱いていた。紺足袋の延長として単色無地の色足袋はあったとしても、過去において柄足袋は庶民的商品として存在しなかったのではないかとの思いが当初から強かった。私のなかで、庶民需要の拡大により発展した行田足袋と非日常的な色彩が強い柄足袋や鮮やかな色合いの色足袋とがまったくつながらなかったのである。

しかし今回、筆者は行田市郷土博物館の所蔵史料の中に、行田足袋業界でも大正期に赤色のコール天生地を静岡県浜松地方から仕入れていたことがわかる経営史料をみつけた⁽⁴⁾。色足袋がたしかに生産されていた証拠の一つとなる。しかも、それだけにとどまらなかった。大正期よりもっと前の幕末～明治前期に、輸入品の更紗を用いた柄足袋をはじめ赤系の色足袋が存在した可能性を文書史料で突きとめることができたのである⁽⁵⁾。大正時代と幕末～明治前期の各々の時代において、行田市内で色足袋や柄足袋が生産されていたことがほぼ確実となった。

そうすると、何よりも当該資料の現物の発見が期待されるが、赤以外の色足袋も生産された可能性をふくめ、この事実確認と現代の実物資料をもとに地域学習のための地域素材として《行田足袋：昔からあった柄足袋・色足袋》をとりあげることしたい。なお、これまで柄足袋については昭和戦前期にハワイ移民向けに生産されていたとの古老の口伝があるが、いまのところ史料的に確認できていない。

(3) むかしの町の中から—江戸時代からあった柄足袋と色足袋—

大正時代よりも前の時代に、ほんとうに柄足袋や色足袋があったのだろうか。そうした次なる疑問を抱き、遡る時代を明治および江戸時代後期に照準をあわせて筆者が史料調査の対象としたのが、行田市上町で足袋屋を営業していた秋山金右衛門家（高砂屋）の「棚卸し」（在庫確認の記録）に関する史料群である。同家は橋本喜助家（荒物屋）とともに行田足袋業界を代表する足袋製造卸の老舗であり、江戸時代中期から明治・大正期までの経営史料が行田市郷土博物館に寄贈・保管されている。それをもとに、幕末期（嘉永4年）から近代前期（明治11年）までの期間における足袋原料の記載内容を解読すると、原料生地の種類と仕入地について、以下の事柄があきらかになった⁽⁶⁾。

■生地の種類が多様性【柄物・色物など】 太字が柄物・色物（ ）は筆者の注

幕末期； **紅紋羽・緋紋羽・上緋紋羽**（5～6文半：子供用）

遠州赤、うこん紋羽、三河造り（？）

更紗紋羽（6文半：子供用）

晒雲齊（足袋底用）、紺雲齊（同）、「野むら染」（？）

幕末期（横浜開港後）；

唐更紗（輸入品：ヨーロッパ製）、唐更紗雲齊（同）、金巾白（同）

晒金巾（同）、紺金巾（同）、天竺金巾（輸入品：インド製）

紅中形（？、染は国産カ）、「紅取合」

明治前期：更紗・紫更紗（輸入品：ヨーロッパ製）

■生地の仕入地の多様性【地元以外】

幕末期；三河白、尾張白、河内尺巾、紀州尺巻、阿波晒

「光明白」（？）、「沖石白」（？） etc

明治前期；丸唐紺地（経・緯糸とも輸入イギリス糸）、

半唐紺地（経糸のみ輸入イギリス糸）、 etc

史料確認によって、柄足袋や色足袋が現代風の奇抜な創作品ではなく、150年以上も前から行田足袋の主要製品のひとつであったことが判明する。それは行田足袋の歴史を刻む重要な因子であり、現代の子どもたちの生活感覚と通底する服飾的な“彩り”であるといえる。

具体的にみると、すでに幕末の嘉永期から紅紋羽、緋紋羽、上緋紋羽など足袋底用の赤系紋羽が用いられ、蘇芳もしくは弁柄などで染めたとみられる「遠州赤」なる他地域産の赤色木綿を表地にした子ども用の色足袋が生産されていたことがうかがえる。また、裏地または足袋底用として更紗紋羽も確認できるので、表地には更紗（密貿易品）ないし色物の木綿が用いられたのでは

ないかと推察される。

安政6年(1859)の横浜開港後から明治前期には、ヨーロッパ製とみられる輸入品の唐更紗と唐更紗雲斎がしばしば登場するので、これらを用いた柄足袋のほか、赤系の色足袋が生産されていた様子もうかがえる。白および紺足袋用のイギリス製の金巾(キャラコ)やインド製の天竺金巾をふくめ、高価であったが当時流行した輸入綿織物を足袋地に機敏にとりいれていたのである。キャラコの白足袋は絹足袋に準ずるものとなっただろう。軽量平滑なイギリス製のキャラコ(金巾)を表地にし、おなじくイギリス製と思われる「唐生雲斎」ないし「唐紺雲斎」を裏地または底地にした白ないし紺足袋がつくられたとみられる。表地と裏地の両方にイギリス製の輸入綿布を用いた上級品の「新」足袋が幕末維新期の市場に出まわったことはまちがいない。

日本では生産できなかった薄地綿布のキャラコ(金巾)のみならず、鮮やかな赤や黄、紫などの色彩による曲線的な草花紋様を捺染した薄地綿布の更紗は、異国情緒を感じさせる「唐物」として幕末開港以前から潜在的な庶民需要が高い人気商品であった。行田における明治前期の輸入更紗の色調として、赤と紫のものが確認できる。

明治期以前においても、幕末開港直後からは色金巾や輸入更紗を用いた色足袋や柄足袋が行田足袋として生産されていたのは確実となる。更紗は、開港以前において庶民層には端切れで流通し、着物裏地の一部や茶道に用いる服沙、紙入れやなどの小道具などの生地などに用いられる高価な商品であった。その輸入更紗が、キャラコ(金巾)とともに輸入反物として仕入れやすくなった幕末維新期に行田(忍町)において足袋地として積極的に使われはじめていたとみてよい。

なお、紅中形は浴衣に応用される中形模様を赤色系染料で捺染したものであったろう。こうした国内外の各種の生地を用いた色足袋や柄足袋はおもに子ども(女兒)用であったとみられるが、若年女性用も一部生産されていたかもしれない。

(4) ふたたび、いまの町へ—小 括—

上述したが、当世風のカラフルな足袋を目にした当初、筆者はかつて行田市内で柄足袋や色足袋がほんとうに生産されていたのだろうか、むかしの人たちはあのような足袋をはいてはいなかったろう、との疑念を強く抱いた⁽⁷⁾。しかし、しばらくしてその存在を史料的に事実確認するや、近代以前までは奢侈品ないし特定の用途に用いられたとみられる足袋のなかでも、とりわけ幼児および若年女性用であった柄足袋・色足袋にこだわるのが、行田足袋の教材化の可能性を大きく広げてくれるものになるのではとの着想をもつにいたった。

おもに大人用であった白や紺色のものよりも子どものまなざしが向きやすいのは、カラフルな足袋ではないのか。ある雨の日に、パラソルのような思い思いのカラフルな雨傘をさして登校する子どもたちを見て、そう思った。しかも、子どもが親近感をもちやすいのは、もともと児童用であった柄足袋や色足袋ではなかったろうか。そこには、子どもの興味や感性をひきつける内在的な要因があるはずだ。現代を模索的に生きる大人たちの社会教育の生涯学習＝地域学習の課題である《町の歴史／町の再生》とも通底し、しかも行田市の過去と現在と近未来をつなぎうる共時的な教育的意義をもちえる可能性がかくだんに大きくなるからである。

ずっと昔から色足袋や柄足袋がたしかに存在し、しかもそれらが子ども(女兒)用に生産されていたことを子どもたち自身が知り、足袋をより身近で歴史的な存在として感じてくれれば、先人たちが生産し続けた行田足袋の来歴と遺産に興味・関心を抱いてくれるにちがいない。それらが現在、足袋産業が衰退し町の再生が模索されるなかで、大人向けの新ファッションとしてのみ

らず、ほんらいの意味においても幼児教育の場における新衣料として少量ながらも生産復活の兆しが芽生えている。

現代的でカラフルな足袋が、子どもたちみずからの来歴にかかわる地域学習の課題をひきだしてゆく。それが可能となれば、和装・洋装を問わず、足袋をはいて子どもたちが大人たちとともに自分たち住む行田市の歴史（過去・現在・近未来）を自由に往来し振り返ることで、新たな状況とまちづくりの具体的方策を探るヒントをたぐり寄せることになるのではないだろうか。そんな期待がふくらむ。

3. 教科内容の取扱いと授業展開案

(1) 教科内容の取扱いについて

小学校の中学年（第3学年および第4学年）の「能力に関する目標」として求められるのが、地域における社会的事象を観察・調査するとともに、地図（絵地図をふくむ）や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力を育てるようにすることである。指導にあたって、とりあげる社会的事象の相互の関連について教師がどこまで状況を把握しておくかが肝要となるが、概況把握（市域の範囲、公共施設や古くから残る建造物などの位置の確認）の際に地図作業を導入するだけでなく、授業展開におうじて社会的事象について相互の関連をおさえる際に、地図を効果的に活用するとよい。

身近な地域や市の地域的特色や様子を具体的に理解するために、『小学校学習指導要領解説社会編』に示された以下の6つの内容を確認しよう⁽⁸⁾。子どもたちが「自分たちの住んでいる地域の社会生活を総合的に理解できるようにするとともに、地域社会の一員としての自覚をもち、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする」ために、先人および現在の大人たちの営みや動きについて子どもとの結び付きが担保され、子どもの視点が過去・現在・近未来にわたって通底することが期待されることになる。

- ア 身近な地域や市の地形、土地利用、公共施設などの様子
- イ 地域の生産や販売に携わっている人々の働き
- ウ 地域の人々の健康な生活や良好な生活環境を守るための諸活動
- エ 地域の人々の安全を守るための諸活動
- オ 地域の古い道具、文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人の具体的事例
- カ 県の地形や産業、県内の特色ある地域

これら6つの指標を意識し、行田足袋を中心とする教科内容にするには、第3学年においてアおよびウ、エとして、行田市の地形や土地利用をもとに、古くから残る建造物に目を向けた中心市街地活性化やまちづくり事業をめぐる市役所、商工会議所、NPO団体などの諸活動を取りあげることで、3指標に関する内容理解につなげることができる。ついで第4学年においては、イおよびオとして、足袋の生産と販売・輸送にかかわる人々とのかかわりで、今回の登録文化財となった足袋関連資料群などの古い道具を取りあげるとともに、祭礼や恵比寿講などの足袋業者にかかわる年中行事に子どもたちの視線および彼らの興味・関心を向けさせるようにしたい。カの埼玉県の地形や産業とからめた他地域の特色に関する年次配列については、第4学年のまとめとするか、

第3学年にも適宜工夫して入れ込み、行田市の地域的特色に関する比較考察の内容とするのもよいだろう。

とりわけ、行田足袋を中核的な地域素材として「イ 地域の生産や販売に携わっている人々の動き」の内容をとりあげる場合には、次のポイントが重要となる。すなわち、地域には生産に関する仕事と販売に関する仕事があり、なかでも足袋屋（足袋製造卸）がみずから生産と販売の両方の仕事を併せ持っていたことである⁽⁹⁾。この事実が、「それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする」ことと密接に関連するとともに、行田市の地域的特色を学習するうえで肝要となる。なぜなら、行田足袋業界の中心的存在であった足袋屋（足袋製造卸）は、江戸時代後期以来、みずからの手で足袋の生産を行うとともに、みずから足袋製品の販売をも手がける特徴的な営業態をとっていたからである。それは、農産物をはじめ、埼玉県内では他地域の特産物（工業製品）である問屋制のもとにおかれていた織物や鋳物などの業種とは、生産—販売の業態が大いに異なる⁽¹⁰⁾。

くわえて、足袋に関する仕事に携わっている人びとの工夫を考える手がかりとして、これまでの地域の人びとの生産や販売にみられる特色である足袋製造卸という〈生産—販売〉の業態が、原材料や商品の仕入れ、生産物の出荷などにおける「他地域との結び付き」を動的に学ぶことが可能となる利点がある。行田足袋の生産と販売をめぐる人びとのこれまでの営みを学ぶと、その地域（空間）的な結び付きが行田市周辺や埼玉県内にとどまらず、原材料の仕入れにおいては西日本に、製品の販売にあつては東日本・北海道へと広がり、またある時代には原材料やミシンの仕入れにおいて外国ともつながっていたからである。いわば伝統的な和装スタイルの一要素の足袋であるのに、その原材料の調達においてヨーロッパ諸国やインドなどとの広域的なつながりがあったことを子どもたちに知ってもらい、人びとによる足袋商品の品質管理にみられる工夫や昔から続く製品革新への努力を驚きながら学べる好適な事例となる。

さらに、足袋業者による自社製品に添付したカラフルな図案からなるカラー商標をとりあげたい。販売や宣伝の仕方などにみられる仕事の工夫を知り、販売者の側の工夫と関連づけて消費者の側の工夫に目を向けさせたいところとなる。

これまでの行田足袋に関する研究では、どちらかといえば単線的で段階論的な足袋産業の発展が論じられてきた⁽¹¹⁾。まず行田（旧忍城下）の足袋生産は、江戸時代後期から幕末・明治前期において地元地域である北埼玉郡周辺で生産されていた棉花とその加工品である木綿（青綿と白木綿）を原材料に用いて開始したとされる。そして、軍需（戦争特需）の加勢を受けながら明治後期の不況を乗り越え、足袋の生地が多様化・ファッション化する大正期になると、地元地域以外からの原材料を広範に仕入れることによって、服地生産をともないつつ足袋産業が飛躍的に発展したとされている。近世および近代初頭の本格的な実証研究がいまだ十分になされていないため、足袋生産の起源はもとより、生産および販売の実態に関する歴史的な動態プロセスが必ずしもあきらかではないからである。

ところが、今回の筆者の史料調査によって、江戸時代後期とりわけ幕末期においてすでに国内の広範囲にわたる諸地域（現在の中部および近畿地方や中国・四国地方など）から多様な原材料の仕入れが行われていた史実が判明した。さらに、幕末開港後はただちに外国製の生地原料が導入され、柄足袋や色足袋の原材料となる更紗や染金巾などのヨーロッパ製の薄地軽量の上級木綿が仕入れられるようになっていたのである。地元で手に入る原材料をもとに行田足袋の生産が順次拡大し、原材料仕入れと販売先の広域化により地域経済圏が段階的に拡大し発展していったと

いう、これまでの通説的理解を私たちは修正しなければならなくなったといつてよい。

このことは、それぞれの時代において、これまでの私たちの想像を超えるような広域的かつ動態的な結び付きが存在したという史実を直視することにつながる。そこでは、結び付きがみられる他地域＝県や国の名称と位置を地図などで確かめる作業を行い、足袋の生産と販売をとおして自分たちの地域が埼玉県内だけでなく、広く国内の他地域とつながっていたことを確認する必要性が生じる。しかも、明治時代以前のずっと昔から、足袋の生産が外国ともかかわりがあることに気づくように配慮して指導することができる好適な教材となる。3～4年生の子どもたちの地域学習にとって最初の歴史的事項をふくむものとなるが、足袋の生産をめぐる外国とのつながりが子ども用の柄足袋や色足袋の生産の必要性から生じていた事実をめぐる、子どもの視点で確認し、子どもとのつながりに関して担保していくことが重要となる。

現在の小学校中学年の社会科では、「他地域とのつながり」の確認が重要な学習内容の一つとなっている⁽¹²⁾。行田市の地域学習において行田足袋をとりあげると、農作物（足袋原料の綿花や染料原料の葉藍、奈良漬用の瓜など）や原材料などの工業製品（各種木綿、藍、化学染料、足袋、ミシンなど）などの生産に関する仕事や製品販売に関する仕事に携わっている人びとが、それぞれの仕事の特色におうじて、外国をふくむ他地域などと多様なかかわりをもちながら、様々な工夫をしてきたことを知り、具体的に考えることができるようになる可能性が広がっていく。

身近な地域で生産されてきた特産物の木綿や藍、そしてそれらを用いた足袋の生産と販売に関する仕事が、自分たちの市の産業として昔から地域に根ざしていることを知る。しかし、ある時代には原材料などの仕入れにおいて積極的に外国とのつながりをもちながら先人たちが様々な工夫を行い、そして地域で生産されてきた特産物が自分たちの生活にふたたび使われはじめていることを知る。検証をふまえてこれらの事例をとりあげることが、現在の行田市の様子や地域的特色を知るうえで重要かつ大切な地域学習の内容を提供するものとなる。

したがって、これまで想定されてきた以上に生起していた広域的かつ動態的な「他地域とのつながり」を知り、しかも外国とのかかわりに気づくように配慮する指導ができるようにするため、地図などによる確認作業のタイミングをふくめ、どのような事例を効果的に配列していくかが重要となろう。

(2) 授業展開案について—概略的指導プラン—

大単元「わたしたちの行田市」／小単元「人々の諸活動、働き、古い道具、文化財」

【主な学習内容】	【主な学習活動】	【資料】
○地域の人々の健康な生活や良好な生活環境を守るための諸活動	■NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークの「古い建造物」足袋蔵の保存・活用に関心を向け、市役所と商工会議所のまちづくり事業を調べる。	◇足袋蔵マップ、報告書事業計画書市6街地図
○地域の生産や販売に携わっている人々の働き	■国登録有形文化財に登録された足袋関連資料4,971点ほどのような種類の「古い道具」であるかを調べる。	◇現物資料 資料整理表 写真、図
○地域の古い道具、文化財や年中行事、先人の具体的事例	■古くから残る建造物の足袋蔵の位置を確認し、白地図に書き込む。 ■柄足袋や色足袋をはいて市内の足袋蔵などを見て廻った市民に感想を聞き、その	◇足袋蔵の分布図 ◇現物資料写真、新聞巡廻マップ

	理由について話し合う。(実際に足袋をはいて歩いた感想を出し合う)	
◎生産や販売に関する仕事と自分たちの生活を支えていることとのかかわり	■《昔(江戸～明治時代)から柄足袋や色足袋が生産されていたのだろうか》について調べ、誰が使ったのかを話し合う。	◇経営史料 文数データ
◎国内の他地域などとのかかわり	■国内外の結び付きがみられる県や国の名称と位置を地図で確かめる作業を行い、原材料の仕入圏と販売圏をおさえる。	◇原材料の仕入地 や販売先データ ミシン供給地
◎生産と販売の仕事の特色と人々の工夫	■市郷土博物館や足袋と暮らしの博物館を見学したり、足袋職人や足袋会社の人に話を聞き、それぞれの仕事の特色を調べる。	◇奈良漬け 商標サンプル製 品の価格表

4. おわりに

いまのところ、江戸時代後期もしくは明治時代に生産された柄足袋や色足袋の現物資料は発見されていない。したがって、授業でとりあげる場合には、同時代の更紗や色金巾などの生地の具体的画像をプリントアウトしたものか、現時点で入手できる複製生地を準備するのがよいだろう。これらの資料が準備しづらい場合には、近年、行田市内でも生産・販売されるようになった柄足袋を、子ども用をふくめ何組か用意しておくのが不可欠となる。

地域の人びとの良好な生活環境を守る諸活動として歴史的建造物の足袋蔵に目を向けるまちづくり事業に注目し、そのうごきとの関連で現代に復活した柄足袋と色足袋を「突破口」にして、子どもたちの興味・関心をひきだしていくことが望まれよう。そして何よりも、地域学習の出発点は、教材化の視点を社会／町のなかに滑り込ませ、子どもたちとのかかわりにおいて自分たち(子ども／教師・大人)の住んでいる身近な地域＝行田市の様子から学習課題を見いだすことが求められる。

注および参考文献

- (1) 行田市郷土博物館『第26回テーマ展 行田の足袋』、同博物館、2016年7月。おもな内訳は、ミシン18点、仕上げ道具63点、足袋製品209点、足袋金型412点、足袋型紙3,181点、コハゼ622点、足袋ラベル275点、その他191点である。
- (2) 中島洋一「行田の足袋産業の歴史と足袋蔵を活かしたまちづくり」、埼玉県文化財保護協会編『埼玉の文化財』第56号、2017年3月、1～12頁。
- (3) 金子要次郎編『福助足袋の六十年』福助足袋株式会社、1942年、181～183頁。ちなみに、この点に関連して同時期に編纂された細谷秋『行田足袋組合沿革史』(行田足袋被服工業組合、1944年)は、「兎に角昔は紺白二種の木綿足袋のみであつたのであるから、付近に青縞(足袋原料用の織物—引用者)の生産地を控へ白木綿(同左—引用者)の産地をも控へて居つた事が早くかうした事業(足袋産業のこと—引用者)の発達を促す基となつた事は押し得らるるのである」(3頁)と記している。
- (4) 足袋地原料商の小川忠次郎家では大正10年代において、静岡県遠州浜松や福田、岡山県児島、山形県鶴岡などからコール天生地を調達していたが、紺のみならず赤のコール天生地も仕入れていた(小川家文書560～77、行田市郷土博物館所蔵)。
- (5) (6) 足袋製造卸の秋山家文書572～604(行田市郷土博物館所蔵)。
- (7) 奢侈品かつ茶道や華道、会見接待・儀礼など、特定の用途の折にはかかれたとみられる足袋がいつ頃から庶民層に浸透し、しかも日常的に用いられるようになった時期については必ずしもあきらかではな

い。この点に関する主要な参考文献の一つである大正中期に書かれた出井盛之『足袋の話 足袋から観た経済生活』（1924年、細谷家文書1467、行田市郷土博物館所蔵）は、庶民や農民層が足袋をはくようになるのが明治期以降であり、柄ないし色足袋が流行る大正期以前において児童、女性または一部の富裕層などが用いたとしている。興味深い指摘であるが、史料的根拠は示されていない。

- (8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』、東洋館出版、2008年8月、16頁・18～47頁。
- (9)(10) 行田市史編さん委員会『行田市史 普及版 行田の歴史』、行田市、2016年3月。
- (11) 最近の研究報告である前掲2)の中島論文や同上の『行田市史 普及版 行田の歴史』も、初期段階での地域資源に依拠した発展パターンを想定して記述されている。
- (12) 前掲8)、文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』。

(2017年3月31日提出)

(2017年4月17日受理)